**進路指導10年の軌跡**

**はじめに**

ここではこの10年の全国および本校の概況を年度ごとに振り返ってみる。詳細な数値（合格者数・平均点等）は以降の資料に掲載している。なお、入試における「平成○年度入試」とは、平成○年度４月の入学者を選抜する入試であり、一般的な年度とは異なる。また、（　）内の数字は前年比の増減を示す。

**一　平成16年度入試**

**・５教科７科目**

　センター試験が大きく変わった。国公立大学の多くが５教科７科目を課すことになり、時間割も変更された。また、短期大学の利用も始まったが、志願者数は過去最多を記録した前年から１万５５３７人も減少した。これは新規高校卒業者数が前年より４万６３２２人減ったことに起因する。国公立大学全体の志願倍率も前年の５・６倍から５・３倍へと低下した。

**・センターの易化**

　センター試験は全体的に易化し、平均点はほとんどの科目で前年を上回った。特に上昇幅が大きいのは国語（+13・07点）と数学ⅠＡ（+9・00点）である。易化した科目が多いなか、数学ⅡＢ・日本史Ｂ・化学ⅠＢの３科目が難化した。

**・強気の出願**

　センターの平均点上昇を背景に全国的に国公立大学では強気の出願が見られた。高校卒業者数の減少により全体的な志願倍率は低下したが、東北大の志願者は増加した。東大（前期）は募集人員削減で志願者数こそ減らしたものの、志願倍率は前年３・１倍から３・３倍に上昇した。受験生の強気が垣間見える。

**・難関大への挑戦**

　本校の大学別出願者数（前・後期計）をみると、東大22（+15）、東北大94（+14）の増加が顕著である。このほかでは北大40、千葉大47も多い。特に干葉大は秋高生の首都圏志向の象徴的存在となっている。

　実際に合格者が増えた大学としては、北大15（+11）、東北大27（+8）、筑波大７（+5）、千葉大11（+3）などがあげられる。特筆すべきは東北大医学部医学科に２名が合格したことであろう。全体として難関大への挑戦・合格が多かったが、結果的に二次力の差が合否を分けた。上位者は実力を存分に発揮できたのに対し、中位層はやや伸び悩んだ印象を受ける。

**・私大の志願者減少**

　３年連続で増加を続けていた私立大学の志願者が減少に転じた。早稲田大は学部・学科の新設があったにも関わらず、全体として約８３００人も志願者を減らした。その主な要因は高校卒業者数の減少だが、現役生に比べて併願校の多い既卒生の減少やセンター試験の平均点上昇が、私立大学の併願校数の絞り込みにつながったと考えられる。

　本校の私立大学合格者数（延べ人数）も、前年より10人少ない１６２人となった。そのなかで合格者が多かった大学は、中央大22（+9）、早稲田大16（±0）、慶應義塾大11（+4）、法政大10（+3）、明治大８（-1）などであった。

**二　平成17年度入試**

**・理系好調**

　７科目を課す大学がさらに増えたセンター試験の平均点は、前年に引き続いて上昇した。目立った難化は英語（-13・93点）、生物ⅠＢ（‐11・09点）の２科目にとどまったため、概して理系の得点は高くなった。一方、英語を得点源とする受験生や生物選択者が多い文系では、得点が伸び悩んだ。

　本校のセンター試験結果（自己採点）は良好で、７科目総合（９００点満点）の平均点で理系は東北地区１位となり、文系も３位と健闘した。大学合格者数（延べ人数）は国公立１９３（+22）、私立２１９（+53）で、いずれも前年を大きく上回った。合格率も前年を９ポイント上回る74・９％であった。

**・東北大・北大の合格者減少**

　合格者数等で好結果を残した本校であったが、東北大（-7）と北大（‐11）の合格者は大きく減った。数字的には、前年の増加分がそのままなくなった形である。最大の要因は受験者の減少で、特に東北大文系の減少が顕著である。文系４学部の受験者は、15年度と16年度はいずれも26名いたが、17年度は13名と半減した。17年度の進路資料『北雄』は、秋高生が東北大文系学部を敬遠する理由を、２次試験に数学が課されているから、と分析している。この背景には、当時の本校では３年文系で数学が選択科目であったことがある。

**・安全志向**

　東北大・北大の受験者減少の要因の一つには、次年度からの新課程入試とセンター試験へのリスニング導入に対する不安もあげられる。センター自己採点後の三者面談希望者が例年より多かったことは、受験生と保護者の不安感の強さのあらわれであろう。国公立後期では、Ａ・Ｂ判定の大学に手堅く出願する生徒が多く、なかには前期で受けた学科とはまったく関連のない学科の受験者も見られた。合格者数は増えたが、「入りたい大学」よりも「入れる大学」を選ぶ傾向が強く、生徒の第一志望合格を願う立場からは手放しでは喜べない結果でもあった。

**・私大専願者の苦戦**

　本校の難関私大の出願者数および合格者数は例年並みであったが、国公立との併願者の方が私大専願者よりも好結果を残した。私大専願にすると負担が減って楽になるような錯覚に陥りやすいが、多くの秋高生が入りたいと考えるような有名大学は、決して楽に合格させてはもらえない。私大の二極化が進むなか、私大専願者にとっての最大の敵は、気の緩みなのかもしれない。

**三　平成18年度入試**

**・新課程初年度**

　本校では、１学級減（１学年８学級）となった生徒が初めて迎えた入試であった。新課程初年度であったことに加え、センター試験英語でのリスニング導入、薬学部の６年制化など、変動要素が多い年度であった。過卒生はもちろん、現役生にとっても、不安を感じながらの受験だったと思われる。

　センター試験はこれまでにも新課程初年度には易化しており、かねてから平均点上昇が予想されていたが、やはり今回も例外ではなかった。平均点は初導入のリスニングが36・25点と高くなったほか、英語（+11・34点）、物理（+13・45点）、生物（+18・02点）などで大幅な上昇が見られた。本校全体の７科目総合の平均点は前年から40点も上昇し、文系・理系ともに東北地区３位の成績であった。また、９割以上の得点者は24人と前年（10人）から大幅に増え、７割以下が30人だけという特異な結果ともなった。

**・強気の出願**

　国公立大学志願者が３年連続で減少し、志願倍率（５・00倍）はセンター試験開始以降最低となった。しかし、センター試験志願者の減少率が約３％であったことを考えると、受験生が国公立大学出願に積極的だったといえる。また、難関大の志願者は前年比１０３・５％と増えており、強気の出願をした受験生が多かった。特に、東大・東工大・一橋大など首都圏の国立大学の志願者増加が顕著である。なかでも東大は、テレビドラマの題材になったことに加え、大学による積極的な説明会開催などにより、志願者を前年比１０４・７％と増やした。

　全国の志願状況を学部別にみると、文系では法・政治学系、経済・経営・商学系が難関大を中心に人気であった。理系では医学部医学科が前年比１０５・７％と志願者を増やしており、ここにも受験生の強気が感じられる。一方、６年制となる薬学部は前年比93・１％と志願者を減らした。

**・東大現役８人**

　本校の大学別出願状況をみると、例年どおり首都圏志向の強さがうかがえる。出願者が増えたのは北大21（+9）のほか、千葉大28（+6）、東京学芸大17（+6）、東大16（+2）、筑波大15（+5）、首都大東京11（+6）などである。一方、東北大47（-14）、京都大３（-8)、東工大３（-7）、新潟大14（-17)などは減少が目立った。

　合格状況では、北大13（+9）、筑波大７（+3）、埼玉大９（+3）、千葉大11（+3）などで合格者が増えた。特筆すべきは東大８（+2）である。現役のみでは昭和49年の９人に次ぐ好結果であった。合格者はいずれも入学当初から一貫して東大を目指してきた生徒たちである。早期に過去問に触れて大学が求めるレベルを知り、長期にわたって対策を練ったことが合格を引き寄せたといえる。

　また、北大志望者が有志で定期的に勉強会を開き、同じ目標を持つ者同士が集団となって力をつけたことも注目に値する。この勉強会参加者の全員が北大合格を果たした。高いレベルで競い合える仲間がたくさんいるのは秋高ならではの学習環境であろう。

**・私大の二極化**

　私立大学の志願者は前年比98・１％となり、３年連続で減少した。そのなかで、センター試験方式の志願者は大幅に増えている。これは、センター試験の易化にともない高得点を利用しての積極的な出願が多かったためである。学部別では薬学部が６年制化の影響で前年比69・１％と激減したのが目立つ。

　本校の私大志願者はほぼ前年並み（延べ５４７人）であったが、学級減を考慮すると１人当たりの志願率は増加している。特に増えたのは中堅私大で、合格者も増えている。一方、早慶などの難関私大は、志願者は前年並みながら合格者は減少した。私大の二極化が確実に進んでいることがうかがえる結果となった。

**四　平成19年度入試**

**・センター試験難化と前期集中**

　センター試験の出願者は４年ぶりに増加した。しかし、７科目総合（９００点満点）の平均点は文系で前年比マイナス39・２点、理系はマイナス42・５点と大幅に下降した。また、国公立大学では後期日程の廃止・縮小による前期集中が進み、受験機会が実質１回となった。これらの影響により、国公立大学の受験者数は約３％減少し、全募集人員に対する倍率は４・８倍と初めて５倍を割り込み過去最低を記録した。

**・秋高では国公立大出願者増加**

　全国の動向をみると、国公立大学志願者が減少する一方で、景気回復や就職状況の好転を背景に私立大学志願者が増加した。ところが、本校に限定してみると、国公立大学の出願者が延べ３６９人で前年比９人増だったのに対し、私立大学出願者は延べ４２３人で前年比１２４入減と大幅に減少した。減少理由としては、私大が全体的に易化していることで受験校を絞り込んだ生徒が多かったことなどが考えられる。特に減少幅が大きいのは、明治大40（-27）、青山学院大30（-15）、東京理科大13（-12）、立教大30（-10）などであった。

**・指定校推薦に19人**

　本校の私大出願者減少の一因として、指定校推薦での合格者の多さもあげられる。私大のＡＯ・推薦入試での合格者は24人いたが、このうち指定校推薦は19人を占めた。この人数は異例の多さである。なお、19人中８人が早稲田大であった。

**・文系苦戦・理系健闘**

　本校の大学別出願状況をみると、出願者が増えたのは東北大68（+21）、東京大25（+9）、横浜国立大15（+7）、北大27（+6）、お茶の水女子大８（+5）などである。一方、減少した大学としては秋田大48（-16））、金沢大０（-7）、埼玉大７（-6）などがある。

　合格状況では、東北大26（+5）で合格者が増え、前年合格者のいなかった東工大に２人の合格者を出したが、前年８人が合格した東大は３人の合格にとどまった。全体として理系の合格状況は前年並みであったが、文系は非常に苦戦し東大・京大・一橋大、さらに東京外国語大も受験者全員が不合格であった。

　医学部医学科の合格者は前年比６人増の16人（国公立14十私立２）と健闘した。東北大に３年ぶりの現役合格者が出たほか、推薦・ＡＯではなく一般入試での国公立大学合格者も出た。

**五　平成20年度入試**

**・難関大志向**

　新規高校卒業者数は前年より約５万５千人も減少した。しかし、センター試験の出願者数は約１万人の減少にとどまり、国公立大学の出願者数は前年比99・８％であった。出願者数の減少幅が小さかった要因の一つは大学志願率の上昇である。特に女子の４年制大学志向の強まりが志願率を押し上げている。その他の要因としては、センター試験の平均点上昇がある。前年に大幅に下がった平均点が文系・理系ともに上昇し、強気の出願が増えた。特に旧帝大を中心とした難関大学での出願者の増加が目立つ。

**・後期縮小と医学科定員増**

　国公立大学では、旧帝大・医学部医学科で後期日程を廃止・縮小する動きが加速した。例えば、名古屋大では後期が全廃され、東大では後期が「理科三類を除く全科類」となり、募集人員は前年までの約３分の１に縮小された。文理共通の総合問題で実施された東大後期は予想どおりの激戦となり、センター試験９割超の得点がなければ第一段階選抜を通過できなかった。

　深刻化する医師不足対策として、医学部医学科の定員増が実施された。この結果、国公立大学医学科の定員は全国で１５３人増加し、秋田大でも定員が10人増えることとなった。



**千葉大十横浜国大**

この両校は秋高生の首都圏志向の象徴的な存在である。東北大の出願者数が100人を超えるようになって出願者が急減したが、東北大から志望変更する生徒は毎年数人いる。ただし、不況による国公立大人気もあって、両校とも合格するのは決して容易ではない。

**北　大**

年度によって出願者数は変動しているが、平均すると23.2人が出願している。東北大からの志望変更も多いが、「何が何でも北大」という生徒も毎年存在する。しかし、平均合格者数は8.8人で、容易に合格することはできない大学のひとつである。

**東京大**

10年をとおしてみると、しだいに出願者が増えてきている。だが、残念ながら出願者数の増加が必ずしも合格者数の増加につながっていない。ここ数年の東大入試では、私立の中高一貫校が公立校を圧倒しているが、地方公立校の意地を見せたいところである。

**東北大**

平均すると、87.8人が出願している。2003年から2009年までは平均で67.6人の出願だが、2010年以降は４年連続で110人以上が出願している。合格者は2009年にようやく30人の壁を突破し、2010年には50人まで増えたが、近年は下降線をたどっている。

**秋高生に人気のある大学の出願・合格状況**

**(人数は現役のみ、出願者数は前期・後期の合計人数)**

**・東北大受験者増加**

本校の大学別出願者数をみると、東北大の増加が顕著である。前期・後期・ＡＯの合計は92人で前年より24人も増えた。特に増えたのは工学部で、42人（+27）と激増した。このほか、秋田大も48人（+25）と大幅に増えた。こちらは医学部医学科が39人（+22）に増えたことによる。一方、出願者が減ったのは東大（-9）、北大（-8）などであった。

　合格状況では、東北大は出願者は大幅に増えたが合格者は伸びず、24人（-2）にとどまった。また、国公立の医学科も出願者は増えたが合格者は９人（-5）止まりであった。全体的に苦戦するなかで、前年合格者がいなかった一橋大に３人、出願者が前年から９人減った東大に５人（+2）が合格した。

**・私大合格者増加**

　本校の私大合格者（延べ人数）は前年より14人増えた。これは生徒の努力の成果でもあるが、一部難関大を除く私大全体の急激な易化の影響でもある。中央大・明治大あたりも易化しており、本校の中央大合格者は前年より９人増えた。一方で早慶の難度は変化していない。そのなかで早稲田大に14人（+2）、慶應義塾大に５人（+1）が合格した。

**・如月講座**

　この年度に関して特筆すべきことは、「如月講座」の開始である。これは、センター試験直後から２月にかけて開設される３年生対象の特別講座で、主に国公立大学の２次試験対策を目的とする。従来の講座との大きな相違点は「原則全員参加」とし、如月講座という名称をつけたことである。３年生にとって２月は自宅学習期間だが、この講座は生徒にも好評であった。「毎日の生活リズムが身につき役立った」「実力アップばかりでなく精神的な支えにもなった」などの感想が寄せられている。

**・全国学力テストの衝撃**

　平成19年４月に小・中学校で全国学力テストが実施された。結果が文部科学省から公表されたのは、秋田わか杉国体閉幕から約２週間後の同年10月末であった。このテストで秋田県は小・中学校ともに全国トップレベルの成績を示し、全国から注目されたのである。そして、平成20年度入試が本番を迎えたころ、「秋田は小・中はレベルが高いのに大学受験で結果が出せないのはなぜ？」「秋田の高校は何をやっているんだ？」という声が県内外から聞こえてくるようになった。全国学力テストにおける秋田県の好成績は本校を大きく変えようとしていた。

**六　平成21年度入試**

**・新たな取り組み**

　新たな取り組みとしては、第一に管理職・３年部主任・進路指導主事による３年生全員との個人面談があげられる。朝７時ころから始められた面談では学習や進路に関する助言のほか、要望の聞き取りが行われた。図書館の開館時間延長（閉館18時→19時半）はこの面談での要望を実現させたものである。

　第二は、職員相互の授業参観である。「知的好奇心を喚起する授業」「教師・生徒の双方向性を持った授業」「思考力を高める授業」を実践するため、教科に関わりなくお互いに授業を参観するようになった。生徒の反応もおおむね好意的で、「後方から見られているので緊張感を持って授業に臨むようになった」という感想が多かった。

**・センター試験の難化**

　センター試験の志願者は前年から約６００人増えたが、平均点はほとんどの科目で前年を下回る結果となった。特に下降幅が大きいのは英語のマイナス10・24点である。７科目総合の平均点は文系でマイナス19点、理系でマイナス20点といずれも下がった。

**・つづく難関大志向**

　センター試験の平均点ダウンを受けて、国公立大学全体の志願者は前年比97・４％と減少した。しかし、旧帝大を中心とした難関国立大学の志願者は前年比99・１％と微減に止まった。受験生の難関大志向が続いていることがわかる。前年志願者が増えた東大は、前期（-2・Ｏ％）、後期（-9・２％）ともに志願者を減らした。一見すると、ここ数年の「東大人気」がかげってきた印象を受ける数値だが、前期は過去10年間では前年に次ぐ志願者の多さであった。

　本校の大学別出願者数をみると、北大29（+13）、新潟大29（+11）、東工大（+6）、東大20（+4）などで数が増えた。一方、減少幅が大きいのは、東北大69（-28）、秋田大57（-16）、千葉大13（-8）などであった。

**・東北大合格者増加**

　本校の東北大・秋田大の出願者は大幅に減少したが、どちらの大学も合格者は増えている。東北大は前年比10人増の34人で、これは平成３年の35人に次ぐ合格者数の多さとなった。秋田大は全体では前年より３人多い30人だが、医学部医学科に限定してみると前年比６人増の13人とほぼ倍増した。

　東北大の合格者が増えた最大の要因としては、ＡＯ入試への積極的な挑戦があげられる。ＡＯⅡ期（センター試験なし）には４学部計で15人が受験して８人が、ＡＯⅢ期（センター試験あり）には３学部計８人が受験して５人が合格した。

　なお、東北大は最終的に過卒生も12人合格しており、現役と過卒を合わせての合格者は46人となった。これも平成３年の48人に次ぐ好結果であった。

**・36年ぶりの東大理三**

　東大の出願者は前年より４人増えたが、合格者は前年と同じ５人だった。しかし、このなかには最難関とされる理科三類・文科一類の合格者が１人ずついる。また、過卒の合格者２人のうち１人が理科三類だったので、結果的に本校から計２人が理科三類への合格を果たした。なお、本校からの理科三類への現役合格は36年ぶりであった。

**・私大進学者の減少**

　私立大学の全国的な志願状況をみると、総志願者数は前年並みだったが、近年増加を続けていた難関私大の志願者数が減少に転じている。早稲田大は前年から約４千人、慶應義塾大は約３４００人が減少した。特に減少が顕著なのはボーダーライン以下の成績層である。これは、挑戦を控えて確実に合格を狙った受験生が増えたためと考えられる。平成20年９月のリーマン・ショック以降の景気後退の影響もあるのだろう。

　本校の私大出願状況は全国の動向とは異なり、早稲田大（+4）、慶應義塾大（+8）、上智大（+3）など、むしろ難関私大への挑戦が増えている。目立った変化としては、青山学院大の激増（+23）、中央大の激減（-35）などがあげられる。また、私大の総出願者数は前年の５４９人から５７４人に増えていながら合格者が減少（１８０→１７４）し、進学者も減少（67→56）している。

**七　平成22年度入試**

**・センター試験難化**

　大学志願率の高まりが続いていることに加え、新規高校卒業者数が９年ぶりに増えたことで、センター試験志願者は前年から約９千人増加した。しかし、センター試験の７科目総合の平均点は文系で前年比マイナス４点、理系はマイナス29点と大幅にダウンする厳しい結果となった。

**・国公立大人気**

　センター試験が難化すると国公立大学の志願者数は減少することが多いが、この年度はセンター試験の難化にも関わらず、国公立大学の志願者数は前年よりも増えた。背景には、不況による全国的な国公立大学人気の高まりがある。特に志願者の増加が目立つのは、少数科目で受験できる公立大学である。

　一方で、東大は２年連続で志願者数を減らした。センター試験難化の影響もあり、数年来の東大人気が落ち着いてきたようだ。ただし、旧帝大を中心とする難関大や医学科の総志願者数は前年並みであり、受験生の難関大志向そのものに変化はない。

**・私大の概況**

　国公立大学の人気が高まったが、私立大学の志願者数も増えており、私大全体では前年比１０３・６％であった。ただし、増えているのは大都市圈であり、地方の私大では志願者の減少が顕著である。方式別では、特にセンター試験方式の伸びが著しい（前年比１０７・８％）。不況下で受験の際の交通費や宿泊費を抑えたいという受験生と保護者の心理が垣間見える。

　早慶などの難関私大では前年に引き続き志願者が減っている。特に関東以外の地区からの志願者の減少が目立つ。もっとも、入試難度は易化しておらず、少数激戦になったといえる。

　本校では、早稲田大41（-27）、明治大53（-25）、慶應義塾大16（-17）などで出願者の減少幅が大きい。一方で、中央大63（+23）、東京理科大29（+17）、法政大38（+11）などで出願者が増えている。合格者の増加が目立つのは、中央大21（+15）、東京理科大11（+6）、日本大８（+7）、日本女子大６（+5）などである。

**・「眠れる獅子」の目覚め**

　この年度は東大に10人（過卒と合わせて16人）、東北大に50人（過卒と合わせて59人）が合格した。いずれも本校の最多記録（平成25年４月現在）である。東大合格者数は北海道・東北地区最多で、東北大合格者数は全国２位であった。東北大は前年以上にＡＯ入試に挑戦する生徒が多く、Ⅱ期で13人が受験して６人、Ⅲ期で32人が受験して13人が合格している。

　この年度の本校の成果に対して、東北地区某高校の進路指導担当者が「眠れる獅子が目覚めてしまった」「もっと寝ていてくれれば良かったのに…」と語ったという話がある。

**・大学入試分析会**

　この年度の受験生が３年生になったばかりの平成21年４月、「大学入試分析会」が開催された。これは、前年まで「拡大進路部会」として開催されていた会議を改めたものである。従来は新旧３年部以外の職員の参加は任意であり、事実上新旧３年部の情報交換会で終わっていた会を、全職員が参加する職員会議の形式にしたのである。これによって、多くの職員が情報を共有し、進路指導について考える機会を得た。

**・模試の解説講座**

　この年度の新たな取り組みの一つに冠模試（大学別模試）の解説講座がある。特に受験者が多い東北大・東大について、本校職員が問題の分析と解説を行った。速やかな弱点補強を狙いとし、模試結果が届いてからではなく受験直後に実施したのである。担当する職員には、各大学の出題傾向をふまえながら解説することが求められたため、講座担当者にとっても良い勉強の機会となった。このほか、回数はあまり多くはなかったが、１回20～30分程度の「昼休み講座」も実施された。３月には国公立大学の後期日程対策として「弥生講座」も始められた。

****

平成23年2月22日付　秋田魁新報

**・基本的生活習慣の確立**

　本校の進路実績が躍進したのは、前年度から始まった新しい取り組みによるところが大きいのは疑いようのない事実である。しかし、それ以前にも、躍進の種はまかれていた。

　この学年は「基本的生活習慣が確立すれば進路実績は必ず向上する」という信念のもと、入学以来、学年一丸となって生活指導の徹底を図った。遅刻や整容のほか、携帯電話やインターネット利用に対する指導を行ったこともある。生活指導は生徒の自主性を重んじる本校では重視されてこなかったが、こうした指導により、遅刻者や休み時間に携帯電話で遊ぶ生徒はほとんど見られなくなり、落ち着いて学習する環境が整った。

**・諦めさせない声かけ**

　この学年ではこまめに生徒との面談が行われた。学級担任による面談のほか、教科担任による面談、さらには学年主任による学年全員との面談も行われた。面談では目標を高く持つことの大切さが語られ、「東大だって届く」「東北大は行ける」など、生徒の可能性を信じ、背中を押すような声かけが行われた。こうした励ましに「勇気づけられた」と話す生徒は少なくない。

**八　平成23年度入試**

**・国公立大人気の継続**

　新規高校卒業者数は減少しているが、センター試験志願者は前年より約５６００人増えた。不況を背景にした国公立大学人気は相変わらずで、就職難を受けて特に教員養成系・医療系など資格取得が可能な学部・学科に人気が集まった。全体として理系人気の一方、文系は不人気で「文低理高」といわれた。

**・センター試験易化で強気の出願**

　センター試験の平均点は多くの科目で前年を上回った。上昇幅が大きいのは数学ＩＡ（+16・99点）、物理Ｉ（+10・07点）であり、前年ダウンした７科目総合の平均点は文系でプラス17点、理系でプラス26点といずれも上昇に転じた。

　センター試験の平均点上昇によって、旧帝大を中心とした難関大や医学部医学科の志願者が増えた。特に理系人気の影響を受けた東工大、総合入試導入初年度の北大の志願者増加が目立つ。２年連続で志願者が減っていた東大も前年比１０４％となった。

**・国公立医学科22人**

　強気の出願は本校でも見られた。特に医学部医学科への積極的な挑戦が目立った。例年、医学科を志望しながら途中で志望変更する生徒も少なくないが、医学科志望者の多くが志望どおりの受験をした。「医学科を単なる憧れに終わらせない」という方針のもと、早期に志望理由書を書かせたことなどが、生徒の初志貫徹の姿勢を生み出したといえるだろう。

　受験の結果も良好で、結果的に国公立大学の医学科に22人が合格を果たした。このうち４人は「東大に匹敵する」とも言われる旧帝大（東北大２、北大１、阪大１）に合格している。この年３月に発売された週刊誌では、本校の国公立大学医学科の現役合格者数は全国の公立高校で最多であったと報道された。

**・医学科以外の状況**

　医学科の合格者が増えた影響もあって、前年に最多記録を更新した東大は５人にとどまったが、このうち１人は現行方式で本校初となる後期の合格者であった。東北大には前年とほぼ同数の48人が合格した。理系の合格者が前年30人から23人に減った一方、文系は20人から25人に増えた。ＡＯ入試ではⅡ期で１２人が受験して６人、Ⅲ期で22人が受験して７人が合格している。

　私立大学は、のべ合格者数は微減（１７７→１７０）ながら進学者が大幅に減った（58→42）ことが特徴で、長引く不況の影響がうかがえる。ただし、全国的に私大受験者が減るなか、本校では早慶の受験者が増えた。早稲田大は49人（+7）、慶應義塾大は25人（+9）が受験している。しかし、合格者はいずれも減少した（早稲田16→７、慶應６→３）。受験者が減っても、難関私大に易化傾向は見られない。

**・東日本大震災**

　平成23年３月11日に発生した大地震の影響により、国公立大学では後期の個別試験を取り止めた大学が25、延期した大学が４、追試験を実施した大学が35あった。東北大は後期を取り止め、センター試験のみで合否を判定した。後期が実施された大学を受験した生徒のなかには、地震による交通機関の麻痺で帰宅が困難となった者もいた。また、東日本大震災は宮城県に多大な被害を与えたため、仙台市内の予備校で再受験を目指す卒業生は例年よりも少なめになった。

**九　平成24年度入試**

**・センター試験の制度変更**

　センター試験の制度が変わった。地歴・公民と理科の実施方法が変更されたのである。科目選択の制約がなくなり、世界史Ｂと日本史Ｂ、物理Ⅰと地学Ⅰといった従来はできなかった選択も可能になった。また、文系では旧帝大などで地歴・公民の４単位科目を２つ受験することが必須とされ、理系においても旧帝大や医学部医学科では、地歴・公民は４単位科目から１つが必須となった。この動きにともなって「倫理、政治・経済」という科目が公民の４単位科目として新設されたが、旧帝大や医学科を目指す受験生にとっては、負担が増えた形となった。

**・センター試験の混乱**

　センター試験の制度変更は、実施段階で過去に例を見ない混乱を招いた。問題冊子の配付ミスや、答案回収時間帯のトイレ希望者の退出等の事件が、試験監督者の理解不足によって全国各地で発生した。このほかにも、問題訂正内容の告知漏れ、リスニング機材の未着などがおこり、再試験対象者は過去最多の３８３６人となった。

**・「倫理、政治・経済」の誘惑**

　センター試験の平均点はほとんどの科目で前年を上回った。

下がったのは数学ⅡＢ・世界史Ｂ・地理Ｂの３科目だけで、最も下がった地理Ｂもマイナス４・24点であった。新設科目の「倫理、政治・経済」の平均点は67・14点て、地歴・公民の４単位科目のなかでは日本史Ｂの67・92点に次ぐ高さだった。この平均点は、この科目が次年度以降も簡単であり続けることを保証するものではなかったが、地歴Ｂ科目を負担に感じる受験生を惹きつけることになった。

**・国公立大志願者の減少**

　２年連続で増加していた国公立大学の志願者が前年比98・１％と減少した。これは、難関国立大を中心に後期日程が廃止されたことや、志願者増加が著しかった公立大でその反動がみられたことによる。日本の不況の出口はいまだ見えず、不況を背景とする国公立大人気が衰えたわけではない。ただし、前年におきた東日本大震災とそれにともなう原発事故の影響によって、東北地区・関東地区の大学は志願者を減らしている。

**・文低理高・資格志向**

　学部系統別の志願状況をみると、全体的には「文低理高」の傾向と資格志



平成24年4月21日付　秋田魁新報

自主的な学習の場として活用される学校図書館

向が続いている。理系は難関大・地方大を問わず志願者の増加が目立つ。文系では法・政治、経済・経営・商系統の不人気が顕著で、難関大でも志願者が大幅に減っている。一方、就職難を背景に教員養成系の人気が高まっている。

**・東大に現役８人**

　理系人気の高まりのなか、東大の志願者は理科一類が前年比１０７％、理科二類が１１０％と大幅に増えた。理科一類にはセンター試験の高得点者が例年以上に集まり、第一段階選抜ラインは過去最高の７７０点となった。激戦となった理科一類に本校から現役で５人が合格したのは大健闘といえる。最終的に本校の東大合格者は現役８人、過卒６人の計14人となり、２年前の最多記録の更新こそならなかったが、北海道・東北地区の公立高校では最多となった。

**・東北大ＡＯで20人**

　東北大の合格者は43人（-5）であったが、特筆すべきはＡＯ入試への挑戦者と合格者の多さである。Ⅱ期で18人が受験して10人、Ⅲ期で33人が受験して10人が合格した。このほか、農学部の推薦に１人が合格しており、合格者全体のほぼ半数の21人がＡＯ・推薦での合格者であった。生徒の積極的な挑戦と指導体制の確立がこの結果につながったといえる。

**・秋大医学科受験者の激増**

　この年度の特徴として、秋田大学医学部医学科志望が多かったことがあげられる。推薦・前期・後期を合わせての総出願者は前年の36人から79人に激増した。しかし、合格者は前年の17人から10人に減少した。残念なことに、第一段階選抜で不合格になった生徒が多かった。これは、センター試験の配点を変更した秋田大に、首都圏をはじめとした県外の受験生が押し寄せたことで倍率が高まったことによる。一定レベルの実力を持ちながら、２次試験を受験できずに悔しい思いをした本校生徒の多くは、次年度にリベンジを果たすことになる。

**・私大受験者の激減**

　全国の私立大学全体の志願者数は前年並みであったが、本校の総出願者数は前年の４８１人から３６１人に激減した。これにともなって延べ合格者数も減少（１７０→１１３）したが、進学者数は増加（42→52）した。進学先としては早稲田大６、慶應義塾大６、中央大５、明治大４、青山学院大４など、難関私大およびそれに続く難度の大学が多かった。

**・北雄合宿**

　24年度入試を受験したこの学年の取り組みとして、「北雄合宿」を忘れることはできない。記念すべき第１回は、入学式直後の21年４月９日から１泊２日の日程で、プラザホテル山麓荘（仙北市田沢湖町）を会場に実施された。生徒向けの「合宿のしおり」には、合宿の目的として次の３点が記されていた。

①　各界で活躍している卒業生等の講演を通して、より広い職業観を形成し、秋高生としての高校３年間の指針を得る

②　国語・数学・英語の学習の進め方を体得する

③　クラス集団・学年集団という意識を形成する

　さらに現在は、校歌・校友会歌を習得することも大きな柱にしている。

　この合宿で最も重視されたのは、進路意識の高揚・職業観の形成であった。単なる学習合宿という位置づけではなかったのである。本校の卒業生および卒業生の保護者計６人を講師に迎えての講演は、生徒はもちろん引率した職員にも好評で、合宿終了時のアンケートでは90％の生徒が「良かった」と評価した。学年主任はのちにこの合宿を振り返って、「生徒ガイダンスとして効果的であったばかりでなく、職員にとっても生徒理解や集団意識形成の点で有意義だった」と述べている。

**十　平成25年度入試**

**・センター試験の難化**

　前年に全国で大混乱が生じたセンター試験は、前年の反省に基づいて運営が行われたためか、大きな混乱はなく終了した。しかし、センター試験そのものが平穏に終わったわけではない。ほとんどの科目で平均点が下がり、２年連続で上昇していた７科目総合の平均点も大幅にダウンした。下がり幅が大きかった科目は数学ⅠＡ（-18・77点）と国語（-16・90点）である。また理科は全科目で平均点がダウンしたため、理系志望者へのダメージが大きかった。

　前年の平均点の高さから、前年よりも約４千人受験者が増えた「倫理、政治・経済」の平均点も６・46点ダウンした。この結果から、この科目が楽であり続けないことを理解した受験生は多いだろう。そもそも、この科目は学習指導要領にはなく、学校での授業は行われない。また、平均点が高かった前年も、高得点は取りにくかった。個別の事情にもよるだろうが、本校生徒にとっては、学校の授業を活用しながら地歴Ｂ科目で地道に高得点を狙う方が得策である。

**・果敢な挑戦**

　センター試験の難化により、全国の受験生が弱気になるなか、本校生徒は第一志望を諦めることなく、積極的に挑戦していった。本校で出願者の増加が目立つのは、秋田大１１７（+19）、北大31（+14）、千葉大18（+10）などである。このほか、筑波大14（+7）、国際教養大13（+5）、東北大１２１（+4）、東大34（+2）なども増えている。

　果敢に挑戦した本校生徒であったが、結果は厳しいものとなった。東大の合格者は３人止まりで、最近10年では19年度と並ぶ最少タイ記録となってしまった。過卒の合格者も１人だけで、計４人というのも最近10年の最少タイ記録であった。僅差で涙をのんだ生徒が多いなか、激戦の後期で１人が合格したのは一矢を報いた形かもしれない。なお、結果的に合格者は少なかったが、第一段階選抜の通過人数（前期は出願者24人全員、後期は10人中５人）は現行制度における本校の最多記録である。

北雄合宿

　22年度に50人が合格して以来、現役だけで40人以上を維持していた東北大も33人の合格に止まった。内訳は文系12人、理系21人である。ＡＯⅢ期では理系の合格者が出ず、前期日程では文系で合格可能性が高いと思われた生徒が涙をのむケースが多く見られた。例年70％以上である東北大合格者の現役占有率が66・９％まで落ち込んだことから、過卒生など「二次力」のある受験生が合格を手にしたと思われる。

　例年よりも合格者が多かったのは、筑波大６（+3）、国際教養大５（+3）、お茶の水女子大４（+2）などである。このうち国際教養大は、22年度から県内を対象に始まったグローバルセミナー入試で３人が合格したほか、Ａ日程で１人、Ｃ日程でも１人が合格した。また、京都大２、名古屋大１（推薦）、大阪大１（後期）、神戸大１（推薦）など、西日本の大学の合格者が多かったことも特徴である。

**・過卒生の強さ**

　国公立の医学部医学科は、現役生が秋田大７（-8）にとどまる一方で、強さを見せたのが過卒生であった。秋田大10（推薦７十前期１十後期２）のほか、名古屋大１、旭川医科大１、金沢大１という結果を残し、現役生を圧倒した。なお、現役と過卒を合わせた医学科合格者の延べ人数は34人（国公立大20十私立大13十管外大１）とほぼ例年並みであった。

**・私大進学者減少**

　本校の私立大学の延べ合格者数は前年の１１３人から１２２人に増えた。しかし、合格者の実数は減少（75→63）し、進学者数は最近10年で最少の38人であった。私大の合格を手にしながら、国公立大学への再挑戦を決意した者が多かった。特徴的なのは、早稲田大合格者の増加（６→12）である。１２人の内訳は推薦４人、一般８人で、例年よりも一般入試での合格者が多かった。

**十一　まとめ　―おのれを修めて世のためつくす―**

　以上、この10年間の進路概況を年度ごとに振り返ってみた。

　最後に、高橋貢校長に本校の進路指導の方針を述べてもらいまとめとしたい。

　現在、本県の少子化は加速度的に進行し、学校も大きな変化の波にさらされている。本校も例外ではなく、かつては１４００人以上いた生徒も、来春（平成26年４月１日）には全校で８２５名の在籍になる。こうした時代に、どの大学に何人入ったかを比較しても、昔ほどの意味があるわけではない。大切なのは、どの大学に何人合格したかではなく、どのような志を持った生徒をどれだけ育てたかであり、現在本校の進路指導は、キャリア教育的視点をベースにそうした方向へ進んでいる。我々は、力不足かもしれないが、受験生を育てているのではなく、人間を育てているという誇りと自負を持って進みたい。ただし、生徒が東大や医学部を熱望するならば、その期待に応えるために全力を尽くすことは当然である。部活も同様である。あくまでも甲子園や花園、そしてインターハイを目指して全力を尽くすことは言うまでもない。それを諦めたことは一度もない。

　本校は、「品性の陶冶」（人間をバランスよく磨くこと）を大目標に掲げている。勉強も部活も学校行事も、すべて「品性の陶冶」のためにやるのだ。すべての教員が、生徒に向かってそれを頻繁に口にしている。

　「おのれを修めて世のためつくす」、この言葉は、あえて口には出さなくとも、生徒も教師も心に刻んでいる。今後とも、秋高の進路指導はこの言葉が土台であり、最終目標である。